

共に生きる

加藤文子

展示会で盆栽を展示する際には、植物名のほか盆養年数も一緒に表示してきた。

盆養年数とは、私が育ててきた年月のこと。植物との生活、そこに含まれた日々を想っていただけのような機会になればと思い、記している。

正確かどうかという曖昧な点もあるが、一九九六年にさいたま市から那須に移住したので、記憶をたどる上で目安になっている。さいたま市の頃からの盆栽か、あるいは移住後に入手したものなのか、思いおこすことでおよその時間がわかる。

実際に数えたことはないが、小さくても最低四百鉢くらいはあるのだろうか。毎日様子をみてきたせいか、自然にそれぞれを覚えてしまう。来歴も思い出せる。

独立当初から四十年近く一緒に盆栽は、道のりを共にしてきたお馴染みさん。おりおりのシーン、思い出が詰まっていて感慨深い。



小さな鉢でも三十年、四十年のものもある。コーヒーカップ型の鉢で育つヒメトクサも、三十八年くらいになる。夫がコーヒーカップを作陶する際、植物用に作ってくれたのだ。

一番最後にした植え替えはいつだったのか記憶は定かではないが、少なくとも二十年以上は行っていない。片手で持てるくらいのサイズの鉢中で元気に育っている。

長いあいだ植え替えないと、鉢中は根でいっぱいになる。成長の行き場を鉢中から盆上に求めた結果、根の力で表土を押し上げていく。少しずつ盛り上がりながら、今ではヒメトクサの球体がカップの上に載っているかのような姿を呈するようになった。このままいったら、カップの背丈より上のヒメトクサの方が高くなってしまいそうだ。いつか頭部が大きくなり過ぎて倒れてしまうかもしれない。

植え替えて毎年しないと調子をくずすものもあれば、カップのヒメトクサのように植え替えをしないまま数十年順調に経過するものもある。はじめから計画したことではなく成り行きでなったことなのだ。

植物名は分類できても、個々の未来を予測するのは難しい。同種の植物であっても、スタートは同じであっても、成長過程で異なった性質を帯びてくる場合もある。

鉢で育てるのは難しいと言われていても案外易しかったり、丈夫で安心なはずがそうではなかったり……。ある時期までデリケートで苦労したものが、次第に手のかからない状態に変わることも

ある。例外や不思議がたくさんあるからおもしろい。

枝の強弱のバランスを調整するのに時々剪定をする。そんな時、取り除いた枝を挿し木したり、摘み取った実を蒔いてみよう、ふと思いつく。

すべてがうまくいくわけではないが、良い具合に成長してくれることもある。これから三十年とか四十年後は見ることができないだろうと思いつつも、今日もイセハナビの挿し芽をしている。

*イセハナビ（伊勢花火）…東南アジア原産のシソ目キツネノマゴ科、イセハナビ属の多年草。



カップ型の鉢と一体となったヒメトクサ

Photo：岩瀬 陽一 ヒトガタ作品：中村学 ガラス作品：家住利男